

中国古典文学大系 59

平凡社

歷代笑話選

松枝茂夫 編訳

訳者紹介

まつえだしげ 夫
松枝茂夫 明治38年佐賀県生。東京大学文学部卒。
早稲田大学教授。専攻 中国文学。主要訳著書『周作
人随筆集』（改造社）『紅樓夢』（岩波書店）曹禺『日
の出』（平凡社）『中国笑話選』（平凡社）

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

中国古典文学大系 全60巻

歴代笑話選

第59巻

昭和45年5月6日 初版第1刷発行
昭和52年5月10日 初版第7刷発行

訳者 松枝茂夫

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地 株式会社 平凡社
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接小社サービス課まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい。(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1970 Printed in Japan

目次

笑禪録	笑贊	雪濤諧史	応諧録	艾子外語	艾子後語	樞子	笑苑千金	艾子雜說	笑海叢珠	群居解頤	諧噱録	啓顔録	笑林
	(全)						(全)	(全)	(全)				(全)

I

明潘游龜撰	明趙南星撰	明江盈科撰	明劉元卿撰	明屠本峻撰	明陸灼撰	明耿定向撰	南宋張致和撰	宋蘇軾撰	唐陸龜蒙撰	唐高彦休撰	唐朱揆撰	隋侯白撰	後漢邯鄲淳撰
一四三	一四〇	一四四	一四二	一三九	一三九	一四〇	一三九	一三九	一四〇	一四〇	一三七	一三二	一三三

「歴代笑話選」総内容

解 説	雑纂二統	雑纂二統	雑纂二統
	(全)	(全)	(全)

IV

拾遺	笑林広記	笑得好	笑倒
----	------	-----	----

III

笑府
(全)

II

宋蘇軾撰	宋王君玉撰	唐李義山撰
一四八	一四〇	一四二

清游戯主人撰	清石成金撰	清陳皋謨撰
一三五	一四三	一三三

明馮夢竜撰
一四六

歴^{れき}
代^{だい}
笑^{しやう}
話^わ
選^{せん}

松^{まつ}
枝^{えだ}
茂^{しげ}
夫^お
編^{へん}
訳^{やく}

笑林(全)

後漢 邯鄲淳 撰

〔一〕 長い竿

魯の国の男、長い竿をもって城門をはいろうとして、はじめ縦に持ったがはいらぬ。横に持ってもはいらぬ。どうしてよいか困っているところへ、年寄がやって来て、

「わしは聖人ではないが、経験をつんでいる。鋸で真中から切つてはいりなされ」

そこでいわれるままに切った。

〔二〕 琴柱に膠する

齊国の男が趙国の人について瑟(楽器の名)を学び、まず調子をととのえてもらった琴柱を膠でかためて帰国した。ところが三年たつても一曲も奏せぬので、齊国の人々はおかしなことだと思っていた。そこへ趙国から来た人があったのでわけを聞き、さきの男の愚かなことを知った。

〔三〕 鳳 凰

楚国の男、雉をかついでやってくる。人から、

「それは何という鳥です？」ときかれて、

「鳳凰でござる」とだませば、

「鳳凰という名前はよく聞いていましたが、見たのは今日がはじめてじゃ。売つて下さらぬか」

「売つてもよい」

そこで千金を出すと、

「それでは売られませぬ。二千金下され」

とうとう二千金出して買った。そして楚の国王に献上しようと思つていたところが、あくる日になって鳥は死んでしまった。その男は金が惜しいと思うよりも、献上できなかったことが残念でならなかった。国の人々みなそのことを伝えて、ほんものの鳳凰でまことに珍重なものゆえ、それを王様に献上しようと思つたのも当然だとなし、ついに楚王のお耳に入れた。王様は自分に献上しようとの志に感心し、これを召しよせ、鳳凰の値の十倍以上の褒美をとらせた。

〔四〕 木の葉隠れの術

楚国の貧乏な男、『淮南子』を読み、「かまきりは蟬をねらうときには、葉にかくれて身を隠すことが出来る」とあるのを見つけ、さっそく木の下にいつて上を見ていると、かまきりが葉の下から蟬をねらっていたので、その葉をたたき落とした。ところが、木の下にはその前から落葉があつて、どれがどれやら区別がつかなかった。そこで数斗も掃き集めて持つて帰った。そして葉を一枚一枚とつて構え、妻に向かつて、

「おい俺が見えるか？」

ときく。妻は最初のうちは、

「見えます」

と答えていたが、そのうちにだんだんうるさくなり、

「見えますん」

とだますと、男大いに喜び、その葉を持って市場にゆき、目の前で人の品物を取った。役人がとうとう捕縛して県庁にひっぱって行った。県知事から訊問されて、頭末を白状すると、知事はハアハア笑い出し、無罪放免にした。

〔五〕 口うつしに唱える

漢の司徒(文部大臣) 崔烈が上党(山西省)の鮑堅を掾(補佐役)として招聘することになった。その拝謁の際、鮑堅は相相があつてはならぬと思ひ、あらかじめ先任の人たちに式の作法をたずねたところが、ある人が「賛礼(儀式の時、号令をかけるもの)の号令に随えばよい」と教えてくれた。

さて拝謁の日、賛礼が、

「拝せられよ」

というと、堅も、「拝せられよ」といい、賛礼が、

「席に就かれよ」

というと、堅も、「席に就かれよ」といった。

やがてまた履をはいて座に上り、席を離れようとしたら、履のありがかわからない。すると賛礼が、

「履は足にはいておられます」

といったので、堅も、

「履は足にはいておられます」といった。

注 原文「随典儀口唱」は「典儀(賛礼)の口唱に随え」といったのを、鮑堅は「典儀に随って口唱せよ」と解したためにこの失敗。

〔六〕 葛龔の上奏文

桓帝(後漢第十代の天子)の時、王公の邸の掾として招聘された人があつた。上奏文が自分で書けないものだから、人に頼んだら、その人も作れず、

「梁国の葛龔(後漢の文章家)は昔立派な文章を作っております。あれをそのまま写して使えばよろしい。何も今さら作ることはありませんよ」

といったので、いわれた通りに葛龔の書いたのを写し取り、葛龔の姓名もそのまま削らずに提出した。さすがの王公もこれを見てあいた口がふさがらなかつた。結局、罷免になつて帰つたのだが、当時の人はそのことを取沙汰していった。

「上奏文は上手に出来たが、それにしても葛龔の二字だけは除くべきであつた」

〔七〕 火打石

ある人、夜急病にかかり、門人に命じて火を切るように命じた。ところがその夜は月のない晩で、まっくらくて、火打石が見つからぬ。はやくはやくとせきたてると、門人ムツとして、

「それはあんまり無茶というものです。鼻をつままれてもわからぬこの暗さではありませぬか。なぜはやく火をつけて照らして下さいな。そしたら私は火打道具をさがして、火を切りますのに」

孔文學（漢末の名士孔融）これを知りて、曰く、
「人を責むるには、その方をもつてすべきである」

〔八〕 臍の中の李

趙伯公は肥えていた。ある夏の日、酔って寝ているところへ、孫がその腹によじのぼって戯れていたが、そのうち、李をその臍の中に押しこみ、七、八個も入れた。彼は酔っていたので全然気がつかなかった。ところが数日たつて、痛みを覚えた。李はすっかり腐って、汁が出た。彼はそれを臍に穴があいたものと思いこみ、死を覚悟して、妻子に家産の処分を命じた。そして泣く泣く家人に向かつていうには、
「おれの腸は腐つてゐるから、もう死ぬだらう」

ところがその翌日李の核が出てきたので、孫が李をつめたのだとわかった。

〔九〕 肥えた嫁

伯翁という人の妹は兄より肥えていた。彼女は王氏に嫁したが、王氏ではそのあまり肥えているのを嫌い、子が出来ないからと難癖をつけて、とうとう離縁した。ところがその後、李氏に再婚したら、妊娠したので、前の口実の偽りであったことが実証された。

〔一〇〕 しまり屋

漢の時代に年をとつて子のない人がいた。金持だが、大変なしまり屋で、そまつな服を着、まずい物を食ひ、朝は早くから、夜はおそく

まで、せつせと仕事に精出して金もうけに余念がなく、そしてむだ金はいっさい使わなかった。ある人が金を無心すると、やむを得ず奥にはいつて銭十枚出してきたが、堂を出て一歩ごとに一枚ずつ減らしていき、外に出た時にはわずか半分しか残らず、目をつむつてそれを与えた。そして頼んでいうには、

「わしは財産の全部をあなたに差し上げた。決して他人にはいわないでくれ。またあなたにならつて無心にこられると困る」

やがて老人が死ぬと、その屋敷田畑はじめ莫大な財産はことごとく政府に没収された。

〔一一〕 百石の塩

姚彪が張温といつしよに武昌（湖北省）に行つた。折から呉興（浙江省）の沈珩が揚子江の岸に風の鎮まるのを待っていたが、食糧が尽きたので、使いの者をやつて彪に塩百石を貸してほしいと申し入れた。彪は気性のほげしい一本気な人であった。その手紙を受け取つたまま返事もせず、温と話をつづけていたが、大分たつてから、そばの者に命じて塩百石を揚子江の水中に投げ入れさせた。そして温に向かつていうのだった。

「わたしは物を惜しむのではない。人に与えるのを惜しむのだ。そのことを明らかにしただけだ」

〔一二〕 しまり屋

呉の沈珩の弟峻、あざなは叔山、高名の士であったが、ひどいしまり屋であった。張温が蜀へ使いすることになり、峻のところへ、

別れの挨拶にきた。峻は奥にはいり、大分してから出てきて、

「前から布を一反えらんで、あなたに饒別しようと思つていたんだが、どうも下等品がないんでね」

といった。温は峻が自分の欠点をあげすけにいうのを賞めた。

また峻はあるとき太湖の岸を通る際、従者に命じて塩水を汲んでこさせたが、やがてあまり多すぎると、少し減らしてくるように命じた。そのあと自分でも恥ずかしくなつて、

「これは俺の天性なのだ」といった。

〔一三〕 愛妻家

呉国の胡鬮という人は生まれついでの色好みであつた。張氏を妻に迎え、これを愛して片時もそばから離さなかつた。

その後、妻が死に、鬮も亡くなったので、家人は裏庭に柩を停めておいた。三年たつて、埋葬する段になつて中をあげてみると、塚の土が二人抱き合つて寝ているような恰好になつていた。人々はみな争つてそれを笑つた。

〔一四〕 母に似る

平原の陶丘氏が、勃海の鬮白氏の女をめとつた。その女は才色兼備で、夫婦仲がよかつた。そのうちに、男児が生まれたので、一緒に妻の実家に里帰りして、妻の老母の丁氏と会つたが、女婿は家に帰ると、妻を離縁するといひ出した。いよいよ家を出てゆくとき、

「わたしのどがお氣に召さなかつたのでしょうか」
と夫にきくと、夫がいうには、

「この前お前のお母さんに会つたら、すっかり老いぼれて昔の面影がなかつた。お前も年をとれば、きつとあんな風になるかと思つたから離縁するのだ。ほかに理由はなひ」

〔一五〕 たけのこ

漢の男が呉にいつたら、呉の人が筍をふるまつた。何ですかときくと、竹ですという。国に帰つてから床のすのこを煮てみたが、いっこう煮えないので、妻にいうには、

「呉の奴は怪しからん。俺をだましやがつた！」

注 この一章は晋の陸雲の『笑林』に出づ。書名が同じために誤つて混入したか。

〔一六〕 酪酥

呉の男が京師にやつて来て、ふるまいを受けたら、その中に酪酥クリイム（牛や羊の乳を凝固させた食品）があつた。何が何だかわからぬままに無理して食つたところが、家に帰つてから吐き、それがもとで重い病氣になつた。で、その子にいうには、

「田舎者と一緒に死ぬのは、今さら後悔もせぬが、お前はゆめゆめあんなものを食うんじゃないぞ」

〔一七〕 食うか食わぬか

南方の男が京師（洛陽）にやつて来ると、ある人に注意された。

「お前は物を得たらただ食べばよいのだ。決してその名前をきくんじやないぞ」

さて主人のところへ行くとして、門の内にはいったら馬の糞があったので、さっそく食うといやな臭いがした。さらに中へは行って行くと古い麻草履が路に棄ててあったので、またそれを嚼んだが、とても食えたものではない。で、連れの者をふり返って、

「食うのはやめた。人のいうことをみながみな信用することは出来なから」

その後、高官のところへ行くと、ご馳走が出た。すると彼はそれをながめながらいった。

「お前たちはさっきの仲間だな。まあ、食わぬにかぎるて」

〔一八〕火熨斗

太原(山西省)の男、夜火事にあい、物を出すのに、銅の鎗を出したつもりが、誤って火熨斗を出した。そこで驚きあやしみ、息子に向かつて、

「不思議な事もあるものだ、火がこないうちに、鎗の足が焼けてなくなりよった！」

〔一九〕せむしを治す

平原(山東省)の人で、せむしを治す名人がいて、
「治らないのは百人に一人くらいものだ」
と自慢していた。

曲がって計れば八尺、真直ぐ計れば六尺というひどいせむしの人が

いて、金はいくらでも出すからせむしを治してほしいと頼んだ。するとその医者は、

「では□して下さい」(原文二字欠。多分、「うつ伏しに寝て下さい」という意味)

と、いって、その人の背中に乗って踏みつけようとした。せむしの男が、

「わたしを殺すつもりか」というと、

「ただあなたを真直ぐにしてあげたいと思っしてしているのだ。死ぬことなんかわたしの知ったことじゃないよ」

注 『百喻経』(第五〇話)と同一趣向。なお後漢から魏にかけての一尺は約〇・二三乃至〇・二四メートルだから、この八尺は今の日本の曲尺の六尺強にあたる。

〔二〇〕物を知らぬ男

ある男、羈府(藩国)の佐(補佐官)になったが、これが全くの物知らず。集会に行つて、歌舞音曲がはじまると、必ずしゃしゃり出て自分も一枚加わる。それでも自分の音痴を恥じる道は知つていて、芸妓が曲を奏するのを人が賞めると、自分もその尻馬に乗って賞めるのだ。ある時、人々が彼を主人に立てて芸妓や客を呼ばせた。すると彼は客が集まる前に、あらかじめ芸妓を呼んで音曲のことをいろいろ聞き、聞いたことを一々手巾の箱の下に書きつけておいた。ところがその前に薬の処方書がそこに書きつけてあった。

さて客が集まって曲目を命ずる段になり、彼は前もって書きつけておいたのを取つたのはよいが、それが薬の処方書のところで、「附子三分、当帰四分」と書いてあったものだから、

「ともかく附子と当帰でお客様を送り出すように」といってしまい、そこで満座大笑い。

〔二一〕 大豆を送る

ある人、弔いに行くのに、何か贈り物をしようと思って、「何を持って行ったらいいでしょう」と人に相談すると、

「お金なり穀物なり反物なり、あなたの持ち合わせていらっしゃる物は何でもいいでしょう」

といわれた。そこで「豆を一斗喪主の前に差し出して、

「何もございませんので、大豆一斗何ぞの用にお使い下さい」というと、喪主は「どうしましょう」といって泣き出した。その男

は豆のことをいわれたのかと勘ちがいで、

「飯の代わりに食べられます」

といった。すると喪主がまた「困りました」といって泣き出したので、

「お困りでしたら、もう一斗お届けいたしましたしょう」

注 喪主は人の礼を受ける場合、必ず大声で哭いて挨拶するのが礼儀であるとされていた。後漢から六朝にかけての礼法は特に厳しかった。

〔二二〕 塩加減を見る

ある人が吸物を作るのに、杓子しやくしですくって嘗めてみたら、塩が少なかったので、塩を足した。そのあとまたさきほど杓子の中に入れた

ものを嘗めて、

「塩が足りない」

といい、こうして何度か、およそ一升ほど塩を加えた。しかし一向に塩辛くならないので、へんだへんだというのだった。

注 『百喻經』第一話と趣向が似ている。

〔二三〕 肉をくわえる

甲、都へ肉売りにゆき、便所にはいったはよいが、肉を持ってはいくわけにはいかぬので、便所の外に掛けておいた。乙、それを偷ぬすんで逃げようとするところへ、甲が便所から出てきて肉をさがした。そこで乙は肉を口にくわえてみせて、

「門の外に掛けていたんじゃ、なくならずにはすみませぬ。こんな工合に口にくわえていたら、決してなくなる心配はありません」とごまかした。

〔二四〕 陳 佗

ある男、臯知事に拝謁したいと思い、知事の側近の者に、「知事閣下は何を好まれますか」ときくと、

「『公羊伝』を好まれます」

との答え。そこでそのあと知事に会い、知事から、

「君はどんな本を読んでいますか」ときかれると、

「もっぱら『公羊伝』を勉強しております」

と答えた。すると知事はちょっと試してみようと思って、

「ではおたずねするが、陳佗を殺したのは誰でしたっけ」

男は大分たつてから答えた。

「わたくしが陳佗を殺すなんて、とんでもございません」

知事はその勘ちがいを知って、こんどはからかっていった。

「君が殺さなかったとすれば、一体だれが殺したんでしょうな」

男こわくなって、足袋はだしのまま逃げ出す。人にわけをきかれ、

大声あげていった。

「たつたいま知事閣下に殺人の事でお訊ねを受けたんだ。今後もう二度と顔出しは出来ない。大赦令が出るまでもとても駄目だ」

注 陳佗は陳の驥公のこと。魯の桓公の六年（西紀前七〇〇）、蔡国の人に殺された。

〔二五〕 涓陽の思い

ある男、父母はなお健在であったが、学問の修業に出て行き、三年たつて帰って来た。母方の伯父に、

「学問をして何ぞ得るところがあったか」

また、

「父上と久しく別れていてどんな気持であったか」ときかれて、

「涓陽の思いは、秦康に過ぐるものがございました」

と答えた。そこで父がさんざんに叱りつけて、

「お前は学問しても、そんなことでは何の益があるものか」というと、

「少くして過庭の訓を失いましたため、学問しても益がございませ

ん」と答えた。

注 知つたかぶりをして、反つてその無学を暴露したものの。「涓陽」は、『詩

経』秦風・涓陽篇のことで、秦の康公が、その母方の伯父にあたる重耳（後の晋の文公）を涓水の陽に送った時に作つた詩。この時、康公の母はすでに死んでいたし、重耳は晋の国主となるために帰ろうとしている。

「涓陽の思い」とは、甥が伯父へ寄せる悲喜こもももの思いである。この男はこの故事を誤用して父と子の関係に使い、しかも現に健在の母を死んだものとしたわけだから、父に叱られたのである。また、孔子が庭を過ぎるその子の孔鯉を呼びとめ、教えを垂れたことが『論語』に見えており、「過庭の訓」、略して「庭訓」とは、父の教育の意である。「少くして過庭の訓を失つた」とは、若い時の父の教育がよくなかった意にも、また若くして父に死なれたため父の教えを受ける機会がなかったという意にも取れる。いずれにしても、まことに怪しからぬ答である。

〔二六〕 鼻を噛み落とす

甲と乙と喧嘩をし、甲、乙の鼻を噛み落とす。官吏これを裁こうとすると、甲は乙が自分で噛み落とすのだといひ張る。で役人が、

「そもそも人の鼻は高く、口は低い。噛めるはずはないじゃないか」

という、甲、

「奴は床、几を踏台にして噛みました」

〔二七〕 人まね

田舎者がいっしょに葬いにゆくのに、みな作法を知らぬものばかり。すると中の一人が、

「俺が少し知ってるから、みんな俺のするとおりにするがよい」

という。やがて葬式の場所にゆくと、その少し知ってるという男が、真つ先にむしるの上に平伏したので、ほかの者みなその背中にくつ

いて順々に平伏する。先頭の男、うっかり次の男の足を踏みつけ、
「ばか！」

とどなりつける。ほかの者、みなそれが作法だと思い、次々にうし
るの者を足で踏んで、

「ばか！」

という。最後の男は喪主もよに近かったので、これも喪主を踏んで、

「ばか！」といった。

〔二八〕 山 鳩

ばか婿、妻の父が死んでその葬式にゆくことになり、妻から作法を
教わってゆく。途中に河があったので、靴下を脱いで渡るとき、片方
を落とした。するうち林の中で山鳩が「ポッポッ」と鳴いたので、そ
の真似をしてゆくうち、挨拶の文句を忘れてしまった。で、式場に着
くと、靴下をはいている片足で立って、はかぬ方の片足をちぢめ、「ポ
ッポッ」といった。喪主たちまでどつと笑うと、

「これ笑いなさるな。もし靴下を拾ったら、わしに返して下さい」と
いった。

〔二九〕 野 菜

いつも野菜ばかり食っている男が、急に羊の肉を食った。すると五
臓の神が夢枕に立って、

「羊が野菜畑にはいり込んで来た」

啓顔録(抄)

〔伝〕 隋 侯白 撰

〔一〕 孔門の弟子

石動箒せきどうすゑ、あるとき国学で博士たちの學術討論の席に立ち会い、「孔子の弟子でその門に達した者が七十二人あった」というところで、「達した者七十二人のうちすでに初冠しよくわんをすませたのは何人で、まだすませぬのは何人だったでしょうか」と質問した。すると博士、

「経伝にそのような記事はござりませぬ」

「先生は学問なすつていらして、孔子の弟子で初冠をすませたものが三十人、まだすませぬのが四十二人あったことを、まさかお解りにならないはずはありませんまい」

「どのような典拠によってそのことがわかるのでしょうか」

「『論語』に『冠者五六人』とありますから、五六の三十、『童子六七人』とあるから、六七四十二で、合わせて七十二人ということになるではありませんか」

そうだったので満座の人々大悦び、博士は二の句がつけなかった。

注 石動箒は北齊の高祖の臣。当時、滑稽な言行で知られた人であつたらしい。

〔二〕 健忘症

鄠こ県(陝西省)に忘れっぽい男がいた。斧をもって畑に柴刈りに行き、妻もついて行った。畑の中へ来て急に便意を催したので、斧を地上においてそのそばで用を足し終わり、ふと斧を見ると大いに喜び、

「斧を見つけたぞ」

といって、雀躍こねどりしているうち、さっきの大便を踏みつけたので、「これはきつと誰か大便をしたときにこの斧をここに忘れて行ったにちがいない」

その妻が、夫の忘れっぽいのを見て、

「さっきあなたは自分で斧を持って柴刈りに来て、大便がしなくなつて、斧を地上におおきになつたじゃありませんか。どうしてもう忘れたんです」

というと、男はその妻の顔を上げしげしげとうち眺め、

「はておかみさんは姓は何とおっしゃいます。一体どこでおかみさんと知り合いになつたんでしたっけな」

〔三〕 鏡を買う

鄠こ県の董とう子し尚しやう村の人々はみな愚かな人々ばかりであつた。ある老人、息子に命じ、銭を持って市場へ奴隷を買いに行かせるについて、「長安ちやんあんの人は奴隷を売るときには、大抵奴隷には前もって知らせず、どこかほかへ隠しておいて、そつと掛け合つて値段をきめる。そんなのがよい奴隷だそうだ」といった。

息子は市場に着き、鏡屋の間を通るに、人が鏡を市に列べており、

それに映った自分の影を顧みて、これは若くて強そうだ。てっきり市場の人がよい奴隷を売ろうと思つて、それを鏡の中に隠しているのだと思ひ、そこで鏡を指さして、

「この奴隷が欲しいがいくらかね」

ときく。市場の人、ばかだと知つて、

「十貫文です」

と吹きかける。さっそく銭をはらつて鏡を買い、ふところに入れて去る。家につくと、老父が門に迎えて、

「買った奴隷はどこにいるんだ」とときく。

「ふところの中におります」

「出して見せろ」

老父が鏡を取つて映しみるに、眉毛も鬚も真白で、顔は黒くて皺だらけなので、大いに怒つて、

「十貫文もの高い金を出して、こんな年寄の奴隷を買う奴がどこにいるのか」

と云つて、杖をふりあげて殴りかかる。息子こわがつて母に告げると、母は幼い娘を抱いたまま走つて来て、その夫に向かい、

「どれ、わたしにも見せて」

と云つて、これまたひどく怒つて、

「おじいちゃんのばか。息子がたつた十貫文で、母娘二人の女中を買つて来てくれてるじゃないの。それを高いだなんて」

老父は喜んで、息子を許したが、どこにも奴隷の姿が見えぬので、みな奴隷は隠れて出ようと思つていた。

折から近所に巫婆がいて、村ではみなそのいうことが非常によく当たると信じていたので、老父はそこへききに行った。すると巫婆、

「ご老人、神様にお供え物をしないことには、お金は集まりません。

それだから奴隷は隠れて出て来ないのです。吉日を選んで沢山食物を用意してお願ひして来ていただきなされ」

そこで老父はご馳走を沢山用意して巫婆を招いた。巫婆はやってくと、鏡を入口に懸けて、歌舞をした。村人が大勢やつて来てそれを見物し、鏡の中を覗きこむのもいたが、みな口々にいった。

「この家は運がついていた。よい奴隷が買えましたな」

ところが鏡の掛け方がしっかりしていなかったため、鏡が落ちて二つに割れた。巫婆はそれを取つて映してみると、そのどちらにも自分の姿がうつっていたので、大いに喜び、

「神様が福を授けられたのです。一人の奴隷が二人の女中に成りました」

と云つて、こう歌つた。

「合家齊しく掌を拍き、

神明大いに舞を散ばる。

奴を買いて婢を合わせ来る、

一個が分かれて兩と成れり」

〔四〕 帽子

梁の時代に、一家全部愚かものばかりの家があり、その息子に命じて市場へ帽子を買いに行かせた。

「帽子は頭の形に合せて作ったものと聞いておる。わしの帽子を買う時には、必ず頭にはいるのを買うのだぞ」

その子、市場へ行つて帽子をさがすと、市場の人は黒い布の帽子を出してみせたが、どれも折り畳んだままなので、とてもこれでは頭にはいりはないと考へ、ふりかえりもせず出て行く。そうして何軒も

店をまわり、一日さがしたがいいのがない。最後に、土器を売ってる店に口の大きなすり鉢があった。腹が丸くふくれていて、ちょうど頭にはいりそうだ。そこでこれこそ帽子だと思い、買って帰った。

その父それをかぶると、顔から首の根っこまですっぽり隠れてしまつて、何も見えぬ。かぶつて歩くと、鼻の頭が磨れて痛いし、しかも息がつけずに苦しい。しかし帽子というものはこんなものだと思ひこみ、痛いのを我慢してかぶつていた。そのうちにとうとう鼻の先にできものが出来、首のつけ根に胼胝が出来たが、それでもぬごうとしない。後にはいつも帽子をかぶつたまま、家の中に坐つたきりで外へは出歩かなくなつた。

さて元日の朝、子や孫たちが年始の挨拶に来る。彼はあらかじめ家中の者に申しわたした。

「お前達年始に來たい者は、なるべく早く来てくれ。わしが帽子をかぶつてしまつてからでは、お前たちの顔が見られないからな」

その朝になつて、老父は家人の挨拶を受けようと思つたが、頭を出してはならぬ(礼儀に反する)ので、帽子をかぶつて待つていた。家人は全部挨拶をやつて来て、石段の下で押した。老父はもう帽子をかぶつていたから、何も見えない。長男の嫁が進んで拝賀し、祝つていつた。

「願わくはお舅様の口がまだ息が出せて、眼がまだはつきり見えて、頭も今までのよう動かせて、足がまだ歩けますように。子々孫々みなともに帽子をかぶり、いつまでも家の中に茫然と坐つておられますように」

(五) 黒 豆

隋の時代のある痴人、黒豆を車に積んで京(長安)へ売りに出かけたが、灞頭(長安の郊外)まで来たとき、車が転覆して、豆がそっくり水の中に落ちてしまった。家人を呼んで来て川にはいつて取らせるつもりで、そのままにして帰つたところが、彼がいない間に、灞店の人がわがれがちに、一つ残らず拾つて行つてしまつた。

その男が引きかえしてみると、数千匹のお玉杓子が群をなして泳いでいるばかり。男はそれをもとの豆だと思ひ、水にはいつて取ろうとすると、お玉杓子は人のけはいに驚き、パツと散つて逃げてしまつた。男、驚き怪しむことしばし、

「これ黒豆よ、おれだということがわからぬのか。おれに背いて逃げてしまひよつて。それにしても、おれにもわからぬことがある。どうしてお前たちは、ちよつとの間に尻尾を生やしたんだえ」

(六) 驢馬の鞍

鄭県の男、銭をもつて市場に出かけた。市場の人々はその頭の左巻きななを知り、またその顎が少し長いのを見て、

「なんだつてきさまは、うちの驢馬の鞍を盗んで、顎に作り変えたんだ」

といつて、役所に突き出すとおどす。そこでその男、持つていた金を残らず出して鞍の代金にあて、手ぶらで帰つて来た。妻にきかれて、あつたことをくわしく話すと、

「ばかばかしい。鞍がなんで顎に作りかえられますか。たとえお役所